

平成28年度事業実績報告書

社会福祉法人 椎原寿恵会

佐賀事業部

<特別養護老人ホーム 真心の園>

・ユニットケアへ移行し丸3年が経過した平成28年度は、入居者の高齢化・重度化による死亡退居者・長期入院による退居者の増加、また平成27年4月より原則要介護3以上しか入居できなくなったことによる実待機者の減少もあり、入居者を満床にすることが年間を通してできなかった。目標であった稼働率97%を大きく下回る平均稼働率93.2%であった。

また介護課の人員不足は深刻化し、他部署・他課よりのフォロー体制を確保してもらうことにより、何とか必要人員の確保を図った。

・平成29年度は、各職員個人の能力・裁量だけに任せるのではなく、施設全体として情報を共有し、状況を分析し、協力しあって管理していく体制作りを行い、各役職・各職種・各職員それぞれが役割を再認識し、またその役割を全うしていくことで、新規入居者の獲得・既存サービスの質の向上、ならびに各職員のモチベーション向上、離職率の低下へとつなげていきたい。

<真心の園ショートステイ>

行事などの活動予定や空き状況に関係機関に配布するなど利用者獲得に向けた取り組みを実施し上半期は順調に推移したが、入院者の増による下半期（冬季）の利用者減が影響し、最終実績としては目標の1日平均15名をやや下回る1日平均14.7名にとどまった。来年度は冬季の利用者減をみこした新規利用者獲得に努めていく。

また他の在宅支援サービス・家族との連携・調整にも課題が残っており、ショートステイは在宅支援サービスであることの再認識を含め、在宅サービスとしての質の向上にもつなげていきたい。

<デイサービス事業>

・毎月施設入所者や入院者があり、利用者減少が発生したがその対応として、利用者獲得の為に各事業所訪問や担当者会議を積極的に活用し、広報活動と利用日追加の提案を行い緊急利用等含めた新規利用者を柔軟に対応し受け入れを行う事ができた。

・職員個人及び事業所全体の介護技術や知識向上の為、外部研修への積極的な参加、内部研修（研修報告含む）やミーティングを実施した。又環境整備、危機管理に努めた。

・利用者の意向及び趣味を考慮し、達成感や満足感が得られるような活動内容の実施ができた。又個別訓練を行い心身機能の維持、向上に努めた。

<訪問入浴サービス事業>

・在宅で生活する重度利用者からの需要が高く、昨年度とほぼ変わらない実績となった。利用者の状況を把握し、家族、主治医、ケアマネージャー等との連携を図り、安全で快適な入浴の提供ができた。

<ホームヘルパー事業>

- ・ケアマネージャーやご家族と密に連絡を行い、毎月のミーティングにて情報の共有化を図る事で、利用者が安心して在宅生活が送れるように支援を行う事ができた。
- ・内外部研修に積極的に参加し、個々の技術の向上ができるよう努めた。
- ・利用者個々に時間を希望する要望があるが、基本的に断る事を控えどのように受け入れる事ができるかの意識に変え利用者を受け入れた。結果、介護予防において新規での申し込みが増加した。

<居宅介護支援事業>

- ・地域ネットワーク会議や自立支援ケア会議に参加し行政や各地区地域包括支援センター、各関係機関との連携を図る事ができた。
- ・各種研修会や事例検討会にも積極的に参加し、ケアマネージャー個々のスキルアップができた。又、事業所内で定期的な事例検討や週単位でミーティングを行い、問題解決力の向上や情報の共有を図る事ができた。

<給食サービス事業>

- ・総配食数、利用者数共に前年度にくらべ、食数は減少した。鳥栖地域では年間利用数は22人減少、みやき町74人減少している。配食の制限が厳しく食数の増加には至らなかった。
- ・利用者の食事内容について個別対応を実施し、衛生面にも気を配り食中毒予防に努めた。
- ・配達時の運転業務については安全運転に努め、大きな事故もなく業務を遂行できた。

<鳥栖市鳥栖西地区地域包括支援センター>

鳥栖西地区地域包括支援センターは包括支援センター事業の委託を受け7年目を迎える。介護・福祉行政の一翼を担う「公益的な機関」として、公正、中立性の高い事業運営を今後も継続して行っていく。

地域包括ケアシステム構築に向けて、高齢者の生活を総合的に支えていく為の拠点づくりを目標とし、地域の方が住み慣れた地域で安心して生活できるよう、今年度も積極的に活動を行っていく。

平成29年4月から新たに介護予防・日常生活支援総合事業がスタートし、地域の実情に応じて、地域住民などの様々な主体による多様なサービスが開始される。今後増えてくる地域のサロンや集いの場にも積極的に足を運び、地域に根付いた活動を行っていきます。又、改めて地域の繋がりが求められる中で、地域包括支援センターがその一役を担い、地域の支え合いの体制づくりを推進すると共に、要援助者の方に対する効果的かつ効率的な支援体制の確立を目指していく。

<ケアハウス花みず木>

- ・平成28年4月1日の段階で入居者数が23名であり、7部屋の空室がありました。地域の医療機関や居宅支援事業所への広報活動や随時相談受付を行い、平成29年1月より入居者数30

名（満室）となり、平成29年3月31日現在の在籍数も30名となっています。

- ・入居者の体調面においては、毎日のバイタルチェック、月1の健康チェックを実施し、体調管理に努めました。体調不良時の緊急対応も随時行いました。
- ・入居者の皆様が安心して生活を送ることが出来るよう、精神面にも気を配り、不安等の解消に努めました。
- ・家族、医療機関、行政機関との密な連携を図り、情報の発信や共有に努めました。

<グループホーム和が家>

- ・主治医や看護師との連携により、利用者の体調管理や急変時の適切な対応に努めた。
- ・地域との関わりを深める為、夏休みのラジオ体操の際には子供クラブにグループホームの庭を開放し、ほとんどの入居者が一緒に参加され、笑顔も多くみられ楽しまれていた。
- ・利用者の入退居時に他事業所や医療機関との連絡と調整を行い、待機者の状況把握に努めていたが、退居から次の新規入居までに期間がかかり、入居率が低下した。

<グループホームみどりヶ丘>

- ・ユニットケアを実施し入居者ひとりひとりが自分らしく過ごす事ができるホーム作り、自立支援に努めた。
- ・月1回入居者が楽しめる行事を企画・実施し、入居者の満面の笑顔が見られご家族にも喜んで頂いた。
- ・地域の中のグループホームを目指し、地元のお祭りや催し物に積極的に参加し、みどりヶ丘団地の皆さんとふれあい、地域との関係作りに努めた。
- ・保育園が隣接されている事を活かして、園内の散歩など日常的な子供とのふれあいで心身の活性化に努めた。
- ・ホーム内外の研修に参加し、職員の質の向上に努めた。

<みどりヶ丘保育園>

- ・延長保育、一時保育、休日保育と保護者の勤務時間のニーズに応えた保育を行ってきたが、休日保育については昨年度より保護者負担が無料となり、利用者が急増した。（H28年度からは本園のみとなった）
- ・支援センターは地域の子育て中の若いお母さん方に対し、遊びの広場、公民館の出前保育等において育児相談を実施。子育てに悩むお母さん方のよき相談相手となっている。
- ・発達障害が多くなり対応に苦慮しているところであるが、保護者との信頼関係を築き関係機関との連携を密にして早期療育に向けて努めてきた。
- ・麓刑務所慰問も4回目となり、地域交流を行う。

鹿児島事業部

<ケアハウスかせだ>

・平成29年3月31日現在の在籍数は30名（単身26名 夫婦2組の入居者）となっております。高齢化が進み平均年齢が85歳を超えています。介護認定者は21名となり訪問介護利用者が10名、認知症対応型デイサービス利用者が6名、有馬病院デイケア利用者が6名となっております。

<デイサービス事業>

（デイサービス遊逢）

・全員が職位毎の人材育成研修等へ参加できたことで、認知症ケア実践者としてのスキルアップは図れた。しかし、年度内に入所系事業所の増床や小規模多機能居宅介護の相次ぐ開設で、重度認知症の方の確保が困難になりつつある。又、入所による利用者減少は顕著で、地域での利用者確保に向けたPR活動や他居宅介護支援事業所から利用者紹介に向けたサービス連携の必要性がある。

（デイサービス金峰やすらぎ館）

・体験利用が10件、新規利用者契約数10件の実績であった。他デイケア等での受け入れ困難、または大規模デイでの利用者へのストレス等の理由により、当デイサービスでの体験を希望されるケースも多く、認知症の症状にあわせた個別対応の重要性を再認識した。利用終了者の内訳は、施設入居2名、死亡1名、転居1名の計4名であった。長期利用者は、8年目となっている。

<ホームヘルパー事業>

・新規の契約者と利用終了が同じ件数位となり、利用者確保が困難な状況であったが、障害福祉サービスの利用者が増え、40名の利用者が確保できた。今後は、利用者や家族の意向に沿いながら、利用回数の増を図って行きたい。

<居宅介護支援事業>

・有馬病院相談員、法人内事業所、他居宅介護支援事業所、有料老人ホームと連携し、新規利用者の獲得を行った。

・認定調査時に調査対象者やご家族の要望に応じて専門医受診、介護保険制度の説明を行い、必要ときは居宅介護支援業務を行うことの説明を行った。

・今後も有馬病院相談員、他の介護支援専門員、精神科病院相談員と連携し、法人内サービスの利用者増加につながるようにしたい。

<かせだフレンドホーム>

・高齢化や疾病の症状悪化に伴い状態が重度化され、入院される数や期間が増加したことにより、

満床を維持することができなかつた。また、退所後の居室クリーニング日程の調整や待機登録者との調整に時間を要し、空床期間が長くなってしまった。

・介護人材不足も深刻で、人員配置体制加算をⅡからⅢに引き下げることとなった。サービス提供においては、ご利用者に支障がないように努めたが、事故やご利用者の介護への遠慮に繋がり運営自体にも影響があった。加算算定や安定したサービス提供を行ううえでも、介護人材の確保は課題となった。

<相談支援事業彩>

・障害福祉サービスの種類や利用者の心身状態により、サービス支給期間やモニタリングの期間が利用者によって異なるため月毎の件数に幅が見られているが、件数の少ない月には利用者宅や各事業所へ近況確認やサービスの利用状況確認などをおこない、利用者の心身状況の把握をおこなうことができた。精神疾患により長期間にわたり入院生活を送られている利用者や在宅で生活をされているが社会参加に繋がられていない利用者も数名いるため、一人でも多くの方が社会活動に参加することができるよう、医療機関や障害福祉事業所と連携を図る必要性がある。

<グループホーム金峰やすらぎ館>

・28年度は9月まで毎月入退居があり、思うように入居率を上げることができませんでしたが、退居された後、スムーズに次の待機者の方が入居できるように対応し、入居率も前年度とほとんど変わりなく保つことができました。

・職員の入れ替わりが多く、誰もが働きやすい職場環境作りが課題となっています。

・地域との関係も構築できており、公民館行事の参加や、公民館講座への出會等行い、地域への情報発信としての役割が来ています。